

<ワン・ポイント・レクチャー> こども未来コース(応用編)

第7回：思春期のころに寄り添った上手な対応とは

ころに寄り添うという言葉について紐解いていきましょう。

寄り添うためには、先ずは「子どもの“ころ”を理解出来る」ことが大前提です。加えて、寄り添っているつもりでも、相手が寄り添ってもらえていると感じなければ寄り添っていることにはならないということをしかり心にとどめておいて頂きたいと思います。

つまり、寄り添うためには“相手”の立場に立つことが不可欠なんです。「なに？そんなことで良いの？」と思われるかもしれませんが、つつい子どもに対して自分の持っている決めつけ、不信感、その時に抱いている感情にも拘らずそれらをコントロールせず、寄り添っているつもり(自己満足)で関わり続けようとしてしまっているんです。しかも、それは専門職ですらよく陥る落とし穴なんです。親がその落とし穴に落ちるのは当然と言えば当然です。が、その落とし穴に落ちた影響をまともに受けるのは子どものみならず、親も受けますので、双方の関係は取り返しのきかないところまで至ってしまうこととなります。

親、特に母親が子どもの心に寄り添うことが難しいのは、実は誰にでもある“全能感”が影響しています。人は神ではありませんので全能者ではありませんが、乳幼児のあらゆることに関してコントロールする力を持っていると感じ(これを自力的全能感と言います)ています。厄介なことに、子どもが少年期、思春期に入っても母親は自力的全能感を持ち続けることが出来ていると思いつけるため、どうしても子どもに寄り添った対応ではなく、母親の枠組みで子どもを操作しようとしてしまいがちになるからです。それは、それまでの母親と子どもの関係＝共生関係から得た“子どものことは親である自分が一番よく分かっている”と過信によっていつまでも全能感を働かせようとしてしまうからなすし、子どもと親は同じ人間ですが、全く異質の性質を有した一個の人間となっていることに気づかない(気づきたくない?)ことが原因でもあります。

以上のような寄り添うということの基本的な理解を踏まえ、思春期の子どもたちのころに寄り添った対応についても、もう一歩前に進めてみましょう。

子どものころに寄り添った対応をするためには、先ずは“親”という役割の“鎧”を脱ぐことから始めます。つまり、一個の生身の人間として接してみることが大切なんです。子どもが思春期になったその時から鎧を脱ぎ始めるなんてことは出来ません。こどもが小さい時から、親の生身の姿(欠点もあるし失敗もするが、良い面も持っているし良い結果ももたらす)を子どもにさらけ出しておくことが大切です。「そんなことをしたら、親としての権威も信用も失うやんか」と心配される方も居られるでしょうが、いくら頑張っても、既に子どもは皆さんの価値や能力・力の程は見破っていますから、ご心配には及びません。

ただ、子どもたちと遊び、“おもしろかった”という経験を沢山一緒にした親子の場合には、子どもたちは親の生身の姿を人間としての自然な有り様として“尊敬”をもって見えていますので心配ご無用です。ところが、そのような経験が乏しい親子の場合には、思春期に入った子どもたちは親に

対してその“鎧”をはぎ取ろうとします。もちろん、親は取られまいとし、子どもははぎ取ろうとして、親子間に激しいせめぎあいが起こります。

はぎ取ろうとする子どものエネルギーがスポーツや勉強・芸術などに昇華(社会的に認められる形でのエネルギーの発散)という形で発散されるなら、親子関係においては大きな波風は立たずに済みます。しかし、そのエネルギーが親に向けられると家庭内暴力、自分に向けられるとシンナー、アルコール、覚せい剤などへの依存、異性に向けられると異性の肉体への過度の関心・接触、社会に向けられると暴走行為といった“逸脱行動”となって現れてしまうことになってしまいます。